
crime, the punishment, and dusk (一時的小説更新停止)

海堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

In the crime, the punishment,
and dusk (一時的小説更新停止)

【Nコード】

N5914D

【作者名】

海堂

【あらすじ】

ある王国の建国百年を記念して王国は活気の賑わいで、人で溢れていた。そしてこの物語に登場する【七人の人間】と【一人の歌姫】も普通の人とは何処か違うが、この世界で暮らしていた。しかし、突然現われた【何か】により、【七人の人間】は大昔の世界の真実を知る事になる。そして、【一人の歌姫】の明かされる真実により【世界】はある野望を知る。これは【七つの大罪】を被った【七人の人間】と【歌姫】、そして【世界】を巻き込む、剣と魔法、天使

と悪魔による不思議で神秘的な物語。試験や検定で勉強をしなければならぬので更新停止をします。言い訳としか思えない理由ですが、ご理解宜しくお願いします。

プロローグ

昔々、人類がまだ全人口が数万人しかいなく、【魔術】や【精霊】、【悪霊】等、神秘的な【現象】があつた頃、【神界】と呼ばれる場所があつた。そこでは、数万人もいる【天使】とそれを束ねる【天使長】、その頂点に立つ【神王】が暮らしていた。

【天使】にはそれぞれ与えられた役目があつた。

下級の第三位の【エンジェル】は下界を監視する役目、天使長は【ガブリエル】。

第二位の【アークエンジェル】は神王の御告げを【人間】に告げる役目、天使長は【ミカエル】。

第一位の【プリンシパリティ】は善霊を悪霊から守る役目、天使長は【アナエル】。

中級第三位の【パワー】は自然界の物理法則を意地する役目、天使長は【カマエル】。

第二位の【ウ”アーチャー】は四季の管理、奇跡を起こす役目、天使長は【ラファエル】。

第一位の【ドミニオン】は天使の務めを統制する役目、天使長は【ザドキエル】。

上級第三位の【ソロネ】は人間の意思を管理する役目、天使長は【ザフキエル】

第二位の【ケルプ】は神界や下界の神殿や寺院を守る役目、天使長は【ヨフィエル】。

そして、最も【神王】に近い階級にいる第一位【セラフ】の役目は【神王】を守ること。そして【セラフ】にだけ、天使長が五人いた。天使の中で最も背が高い天使長【メタトロン】。

最年少で【セラフ】の天使長になった【ウリエル】。

【ウ”アーチャー】の天使長でありながら【セラフ】の天使長でもある【ラファエル】。

同じく【エンジェル】の天使長であり、只、一人だけの女性天使長【ガブリエル】。

そして、【神王】と同等の力を持つ【ルシフェル】。

この五人により【神王】は守られ、【神界】と【下界】の平和と秩序は守られてきていた。

しかし、ある一人の【天使長】が数万人いる【天使】の三分の一を引き連れ、【神王】に反乱を起した。その【天使長】と【天使】の軍団は洪水の如く【神王】のいる宮殿に押し込むと【神王】を目指し、突っ込んできた。

しかし、ある一人の【天使長】により反乱を鎮圧することが出来た。

反乱を手助けた【天使】は全て処刑。

反乱の主権者である【天使長】は永遠に溶けることがない氷の中に閉じ込め、【下界】に封印した。

反乱を鎮圧した【天使長】の功績を認めた【神王】はその【天使長】を【セラフ】の【天使長】として迎えた。

新しく【セラフ】の【天使長】になったのは【墮天使】になった【天使】の弟【ミカエル】。

そして、下界の中心に位置する小さな小島に封印された【墮天使】の名前は【ルシフェル】。

こうして【神界】の平和は守られた。

しかし百年後、【下界】に突然現われた【魔物】に人間は苦しめられていた。それを可哀相に思った【神王】は七人の人間を作った。そして、【神王】はそれぞれに【プライド】【エンビイー】【グラトニー】【ラスト】【スロース】【ラース】【グリード】と名付け、それぞれに合う【能力】【意思】を加えて人間を守るように命令をすると【下界】に放った。

【神王】は七人の人間を【七つの大罪】と呼び、【エンジェル】に監視させた。

それは、現在も続けられていると言いつ伝えられている。

第一章 七つの大罪と罰の集い

一体何故、世界から【魔物】が消えたのか、誰も知らない。古代時代の資料からは【魔物】は人間を苦しめる怪物で怪力を持ち、残酷で、とてもじゃないが人間に太刀打ち出来ない存在と説明されている。しかし、何故【魔物】が世界から消えたのか。その資料は未だに見つかっていない。

それにもう一つ、世界から消えた物がある。それは古代時代にのみ存在していた【聖なる技】。しかし、それは異端であり禍々しかつたため【聖なる技】を使う人々はみんな殺されてしまった。

そんな【禍々しい存在】が消えた世界では人間は国を作り、軍隊を作り、人間による【人間のための世界】を築いていった。

一人の人間が広大に広がる砂漠の真中を歩いていた。茶色で所々穴が開いている大きな布を体全体を隠すように羽織り、太陽が照りつける砂漠の中を歩いていた。布の隙間から見える銀色の短剣が歩くたびにキラキラと輝いていた。

「・・・・・・」

遠く広がる砂漠の向こうに大きな城が見えた。土色の外壁の近くには、沢山の馬車が並びその近くには暑いなか、タキシード姿で次々馬車から降りる【貴族】のような出で立ちの人々が様々なドレスを身に付けて城の中に入って行た。

「・・・・・・」

遠く眺めていたその人間は無言のまま砂漠の中を歩いていた。

【ドウニウス王国】は最初は小さな村だった。砂漠の地下に広がる【カレーズ】を飲み水として引き、近くにある海から魚を取り、生活していた。それが、今では城が建ち、王様が誕生し、法律が作られ、商業、工業が発達した大国になった。何故、小さな村から大国になったかと言うと【交通】が鍵を握っていた。この世界では【船】が交通の中で最も重要性されていた。【ドウニウス王国】が誕生し

たお陰で、船での移動が数倍も楽になったのだ。小さな村から大国に成長するのに必要なのは、【此所に国を作れば何が変わるのか】という【発想力】が大事なのだ。【俺】はそう思う。

「教授！此所にいたんですか！」

「なんだ・・・君か」

「なんだ・・・じゃないですよ！勝手に部屋を出ていかないで下さいよ・・・さあ、部屋に戻って下さい。」

「うるさいな・・・君に指図されなくとも戻るよ。」

一人の男が【ドウニウス王国図書館】から出て来た。長身で茶色のズボンに橙色のポロシャツを着て、首に銀色の剣状のアクセサリを身に付け、青色で坊主並に短い髪の子は腰に拳銃を付けていた。【教授】とは正反対な風貌を醸し出していた。男は一度大きな背伸びをすると、民衆が集まっている【ドウニウス城】を見つめた。

「それにしても、此所にいる奴等は皆馬鹿ばかりな面構えだな・・・」

「・・・その性格、直した方がいいですよ？皆、教授の事が嫌いらしいですよ・・・僕もですが。」

「無理だね。それに、お前らが嫌いだろうがそんなの関係ない・・・
それに本当の事だろう？此所にいる奴等は馬鹿ばかりなんだ。」

男はそう言い放つと、民衆の中に消えて行つた。

【ドウニウス王国】の商業区と工業区の間には飲食店が並んでいた。
人々の賑わう声が聞える中、一軒の店の前に沢山の人が店を囲んでいた。
皆、何かを応援していて隣りでは、人々がお金を出して何かを賭けていた。

「おい！早く食べよ！」

「うぐ・・・もうキツイ・・・」

「馬鹿！俺はあんたに給料三か月分賭けてんだぞ！ほら、ガツガツ
行けよ！相手みたいに・・・」

店の中には、二人の男がテーブルの上に皿を何枚も重ねながらドウニウス王国の主食【カレー】を食べていた。一人の男はぶつくりと太っているが、顔色を真っ赤にして汗を垂れ流しながら必死になって食べていた。

「・・・なんて奴なんだ・・・顔色一つも変えずに食べてやがる・・・」

もう一人の男は真っ黒なマントと、灰色で所々汚れている鎧を身に付け黒髪を整えた、切り傷が右目から斜めに付けられている男だった。長身でがっちりとした【熟練戦士】のような男が、一つも顔色を変えずに黙々と【カレー】を食べていた。

「うう・・・ぐう・・・も、もう駄目・・・」

太っている男がスプーンを床に落とすと、まだ残っている【カレー】に頭から倒れた。横にいた若い男は、激しく揺らして激怒したが、ピクリと動かなかった。後ろにいる観衆は雄叫びを上げ喜んだり、嘆いたりしていた。

「店長！おかわり！」

「え！・・・勝負はもう済んだんじゃ・・・」

「それはこいつらが、勝手にやったことだ。俺には関係ない・・・」

それより、おかわり！」

「は、はい！」

男の隣りには、かなり大きな赤一色の大剣がかけられていた。

【ドウニウス】とは、【ドウニウス王国】の初代国王【ドウニウス・ハルベルトン】の名前から取られた。そして、王国の中心に位置するこの公園の大きな噴水の上に【ドウニウス・ハルベルトン】像が剣をかざした姿で建っていた。公園には子供達がボールを蹴って遊んでいたり、老夫婦が微笑ましく子供達を眺めていたり、王国に住む住民にとっての憩いの場になっていた。

「ああゝ・・・怠い・・・」

その公園のベンチに、薄緑色の短髪で膝くらいのデニムのショートパンツで青色と赤色の刺繍を施したＴシャツを着た少年が怠そうに座りながら空を眺めていた。耳に付いているピアスには初代国王が好んで付けていた【太陽を象った獅子】の形と一緒だった。

「ああ・・・雲はいいよなあゝ・・・あんなにゆったりと動けるし・・・」

「全く・・・いいご身分だな？」

「ん？」

少年の目の前には、銀色の鎧を身に付け、真つ赤な髪を腰まで伸ばした女性が少年を軽蔑するような目で見ていた。そして、その鎧にも【太陽を象った獅子】のマークが付いていた。

「・・・暑くないの？」

「体中汗でビショビショだ。全く、何故私がお前みたいな身分の者を探さなくちゃならないんだ？・・・お陰で、体中汗臭いし。」

「まあまあ、そう超遠回しに妬まなくてもいいんじゃない？それにほら、今日はこんなにいい天気じゃないか。」

「それが、どうした？お前はいつもそうだ・・・超が付くくらいの面倒くさがり屋なのに、あんな豪華な服も着れるし・・・」

「・・・そんなに妬むと【妬みババア】になっちゃうよ?」

「あんた本当むかつくわね。それよりも、早く戻らないと私はあの【クソ大臣】にねちねちと文句を言われる。戻りますよ?」

「ええゝ・・・もつとこうしていたいよお・・・わかったよ、戻りますよ。だからそんな怖い顔で睨まないで・・・」

急に殺意を醸し出した女性に怖じ気付いたのか少年はゆっくりと立ち上がった。

「・・・それじゃ行きますよ?【怠け王子】。」

「はいはい、行きますよ【妬み兵士補佐長様】。」

国の栄光と繁栄の裏には必ず【悪】が存在する。

【ドウニウス王国】の商業区。民衆が暮らす家が並ぶ中、裏路地は薄暗く、そこだけ涼しかった。そこは不良の溜り場でそこで殺されたり、喧嘩をして負傷したり、逮捕された人々は数えきれない程いる。そして、今日も裏路地では三人程の男が道を阻むように座っていた。辺りは薄暗く、三人の他に人はいなかった。

「なあ、暇じゃね？」

黒いジーンパンをはいた男が隣りにいる眼帯を付けた金髪の男に聞いた。

「暇だな・・・なんか面白い事ないか？」

「今日は・・・あれだろ？だけど、俺達には関係ないね。つまんねえし、堅苦しいし・・・」

「だけど【歌姫】出るだろ？・・・あの子可愛くね？」

「マジな！あの子はめっちゃ可愛いよな！・・・はあ、俺達にもあんな可愛い子出来ねえかな？なあ！」

二人はもう一人の男にも聞いてみた。男は煙草を加えていたが、何故か呆然と前を見ていた。灰がいまにも落ちそうだった。

「おい、どうした？」

「あれ・・・見て見ろよ。」

男が喋るのと同時に落ちそうな灰が崩れ、服の上に落ちた。二人は男の言う通り前を見た。

「・・・あ」

目の前にいたのは、真っ黒でスマートなドレスを着ている女性の後ろ姿だった。髪も黒く軽くウェーブがかっていた。

「いつの間に・・・いたんだ？」

「さあな・・・だけど、後ろ姿のスタイルが堪らないな・・・」

眼帯の男は立ち上がると、前を歩いている女性に近付いて行った。眼帯の男がやろうとしている事を二人も気付いたのかお互い顔を見ると立ち上がり女性に近付いて行った。そして、最初に声をかけた眼帯の男は女性の白い肌をした肩に触れた。

「ねえ、お姉さん？暇してる？」

そこにいた女性は、一言で言うと【完璧】な女性だった。【完璧】に調った顔のパーツに豊満な肉体、ドレスをぎりぎりまで下ろしていたので胸元は男を誘惑する武器となっていた。

「お姉さん、もし暇なら俺達と遊ばない？」

眼帯の男は、口元をニヤニヤさせて女性を誘った。後ろの二人も笑っていた。すると女性は三人の男を見るや赤い唇をつり上げ微笑んだ。

「丁度よかった・・・私、お腹が空いてたの。」

「そうなの！なら、今から飯食いに行かねえ？俺達、旨い店知ってるぜ？な！」

男は、後ろにいる二人の方に視線を向けた。しかし、そこに二人の姿はなかった。

「あれ？・・・あいつら何処に・・・」

「あら、もうやっちゃったの？もう・・・食い意地はっちゃって・・・」

「え・・・」

男はもう一度女性の方を振り向いた。女性の漆黒の瞳は徐々に赤く燃え上がるような色に変わり、瞳全体が血のような色になった。目の中心には小さい黒い点が浮かび、そして、口の隙間からは鋭い歯が見えていた。

「ひ、ひい！ば、化け物だ！」

男は後ろを振り返り逃げ出した。そして、路地の曲がり角を曲がった所である物が目に入った。

「な、なんだよこれ・・・」

薄暗い路地に広がるのは、一面真っ赤な世界だった。そして、そこには二人の男【だった物】がいた。肉が裂け、臓器が外に散らばっている中、大きめの二匹の猫がその肉を食べていた。“ビチャビチャ”と音を発っていた猫は男の声に気付くと、ゆっくりと振り返った。鋭い目付きに口には血が大量に付いていた。

「ひい！」

男は後ろに下がろうとした時、柔らかい物が当たった。男は恐る恐る振り替えると、あの女性がいた。女性は怪しく笑うと口を大きく開けた。鋭く尖った歯が覗かしていた。

「う、うわああああ！」

男の声が裏路地に響いて消えた。

砂漠の王国【ドウニウス王国】の城門前には、沢山の人がいた。露店を開く者もいれば、ピエロの格好をした曲芸師がお客を楽しませていた。その中に、茶色い布を体全体を隠すように羽織った男が沢山いる人々を避けながら黙々と歩いていた。露店からの美味しそうな匂いにも、曲芸師の陽気で楽しい曲芸にも、まるで関心がないのか只、一点を見つめて歩いていた。

「あの、すみません。」

そんな男に話しかける者がいた。男が下を見ると、茶色の髪に小麦色の肌、小さな刺繍を施したタンクトップの上から白い服を着ている少年だった。少年はおどおどしながら男を見上げていた。

「し、商業区にはどうしたら行けますか？・・道に迷ってしまつて・・」

男は黙つて少年を見つめていた。少年も何も言わない男に困つてしまったのか、辺りをキョロキョロと忙しく見ていた。

「あ、あのお・・」

「・・・・・・・・・・付いて来い・・・・・・・・教えてやる。」

「え！は、はい！有り難うございます！」

また黙々と歩き始めた男の後ろを少年は嬉しそうに付いて行つた。所々穴が開いている布の隙間から見える銀色の短剣に少年は気付かなかった。

その1

商業区の入口には、二人の兵士が立っていた。暑い中、鎧の中は想像以上の暑さに違いのないのに、二人は微動だにせず真直ぐ前を見ていた。国王への忠誠心、情熱、執念がこの二人を暑さから守っているかのようだった。

「あ、此所です！」

商業区の入口から数十m離れた所に、あの少年がいた。

額からは汗が流れ、タンクトップが少し滲んでいた。そして、少年は横を見ると、数メートル先に、体を覆い被さるくらい大きな茶色の布を被り、歩いていた。

「有り難うございましたあ！」

少年は大きな声で、男にお礼をした。男は聞こえていないのか、何も言わず歩いていた。少年はため息を付くと、その男の後ろ姿を見つめた。

「クールな人だな・・・でも、よかった。この歳で迷子だなんて・・・情けない。」

少年の炫きは、人込みの中に消えていった。そして、商業区の入口の方を振り向き、歩き始めた。

商業区の中は高い建物が並び、木が等間隔に植えられていた。行き交う人々の殆どが、幾つもある建物で働く【労働者】である。そして、【労働者】が住む場所も此所、商業区の奥にある住民区で暮らしていた。

「
　　・・・」

少年は鼻歌を歌いながら、商業区と住民区の間には掛かる通路を歩いていた。

「【ネロス】
　　！」

ほんのりと明るいその通路の奥で、金髪の少女が手を振っていた。

「あ！【レミナ】！久し振りい！」

少年【ネロス】は手を振る少女を見るや、笑顔になり少女の所まで走った。そして、少女から数メートルでスピードを緩めると、歩き始めた。少女【レミナ】も白いワンピースを揺らしながら【ネロス】に近付いた。

「えへへっ・・・久し振りだね【ネロス】。また背伸びたんだね？」

「うん。だいぶね・・・」

「いいなあ・・・私はあの時のままだもん。あの時の【ネロス】は私の胸くらいしかなかったのに・・・今じゃ逆に私が【ネロス】の胸くらいしかないよ。」

「その内伸びるよ。それよりも祖母様、元気にしてる？」

「勿論よ！それに祖母様つたらもう八十九歳になるのに、未だに男をナンパしているのよ！本当、信じられないわ！」

「ハハッ！それくらい元気なら長生きするね。それじゃ、今から祖母様に会いに行くね、それじゃ。」

【ネロス】は【レミナ】の横を通り抜けた。

「・・・待つて！」

突然【レミナ】は、【ネロス】の右手を掴んだ。【ネロス】は不思議に思い振り替えると、【レミナ】は、ほのかに頬を赤くさせながら【ネロス】をジッと見つめていた。

「どうしたの？」

「あ、あのね・・・その・・・ば、祖母様に会ったあと・・・・・・・・・・い、一緒に・・・【建国祭】に行かない？」

「え・・・いいよ！」

「本当！それじゃ、時間になったら祖母様の所に迎えに行くね！」

「うん、わかった。」

そして、【レミナ】は手を放して遠く離れて行った【ネロス】を姿が見えなくなるまで見つめていた。しかし、その表情は少し暗く、残念そうにしていた。

「まだ気付いてないんだね・・・私の気持ち。沢山、アタックしたのに・・・」

【ネロス】の反対側の道を振り向いた【レミナ】は何かを考えるように腕組みをして歩いて行った。

「今日の【建国祭】で告ろうかしら……なんてね。告白は【ネロス】からしてもらいたいなあ……」

その呟きと共に【レミナ】は、商業区で行き交う人々の中に溶け込んで行った。

【ネロス】と【レミナ】が言っていた【祖母様】とは、この大国がまだ小さな村だったころの村長の家系に位置して、二人にとってはもう一人の母親のような存在の人物である。国王とも友人関係にある【祖母様】はこの大国では知らない人がいない有名人であり、変人である。

「懐かしいなあ……あれから十年も経つのに全く変わってないや。」

【祖母様】の住む家は、今では珍しい藁で出来た大きな屋敷のような家だった。他の家々は全てが、レンガやコンクリートで出来ているのに、此所だけが歴史から外れたような雰囲気だった。古臭い風貌だが、力強い印象を醸し出していた。

「【祖母様】！ただ今帰りました！」

家の中は外見とは違い、少し狭い土の廊下が進んでいた。そして、奥の方で小さくともかわいらしい動物が“ミュミュ”と鳴きながら【ネロス】の方に駆寄って行った。

「あ！バルバトス！」

可愛い外見とは全く異なる、強そうな名前を持つその動物は【ネロス】の足に抱き付き、のじ登ると肩に座り、【ネロス】の頬をすり寄せていた。

「おや、【ネロス】かい？」

そして、バルバトスが出てきた部屋から姿を現したのは、しゃがれた声とは裏腹にまっすぐと伸びた姿勢で近付いて来るかわいらしいお婆さんだった。色とりどりの服装は、この大国では着る人が殆ど着ない民族衣装【カシューシ】だった。

「あ、【祖母様】。元気にしてた？」

「勿論じゃ、お前が来るのを楽しみにしてたからのお・・・さあさあ、こんな所で突っ立ってないで、はよお中に入りなさい。」

【祖母様】の後ろを、【ネロス】は懐かしそうに壁にかけられている絵や写真を眺めながら歩いて行った。

「どうなんじゃ？あつちでの暮らしは？」

「なかなかいい所だよ！町の人達もいい人ばかりだし・・・」

「そうかそうか、それはよかったのお。」

【ネロス】と【祖母様】は土の廊下を抜けた広い居間で、紅茶を飲んで楽しく会話をしていた。家の中にある全てが懐かしく、また少し涼しいのに温かい紅茶を飲むのはこの家だけである。そんな雰囲気

気が【ネロス】の中で一番落ち着く場所だった。

「【祖母様】。一人でこの家に住むの寂しくない？」

「【レミナ】がおるからのお・・・寂しくはないが、やはり・・・」

「やはり？」

「男が欲しいかのお」

【祖母様】の言葉にさつき口に含んだ紅茶を吐きそうになった【ネロス】は、無理矢理飲み込むと激しく咳き込んだ。

「なんじゃ？わしはこれでもモテモテなんじゃぞ？」

「ゴホッ・・・ゴホッ・・・いや・・・別に悪いとは言っていないしさ・・・別に男はいらない？」

「何を言っておる！わしは男がいるからこんなに若くいられるのじやぞ？それに、お前こそ【レミナ】の事が好きなんじゃろ？」

今度は思いきり紅茶を吐いた。【ネロス】は咳き込みながら、口を

拭くとニヤニヤ笑う【祖母様】を睨んだ。吐いた紅茶はそばにいたバルバトスが“ペロペロ”と小さい舌で一生懸命舐めていた。

「図星じゃな？どうじゃったあ？【レミナ】は？ときめいたじゃろ？」

「そんな関係じゃないよ。只の友達だろ？」

「なら、あっちで作ったのか？」

「作ってないよ。それに、僕なんかに作れるわけじゃないか・・・

・【例のあれ】を押さえるために夢中だったんだから・・・」

「【例のあれ】ねえ・・・」

二人は静かに紅茶を飲んだ。【ネロス】が言った【例のあれ】で、その場の雰囲気は暗くなったような感じがした。

「【例のあれ】は・・・今も出ているのか？」

「今は大丈夫だよ。コントロール出来るようになったし・・・」

「そうか、それはよかったのぉ・・・心配してたのじゃぞ？もしかしたら、【例のあれ】で友達が出来なかったりしてないか・・・」

「友達はあるよ。みんな優しく、楽しい仲間だよ。」

「そうか・・・」

【祖母様】は最後の一口を飲み干すと【ネロス】を見つめた。淡い青色の瞳に【ネロス】の顔が写っていた。

「【レミナ】は待っていたぞ？十年間も・・・一人で・・・【例のあれ】に縛られているお前をじゃ・・・」

「・・・」

「何故、十年間も帰って来なかったかは知らんが・・・」

【祖母様】の言葉はしゃがれていたが、優しく【ネロス】を包み込むような感じだった。【祖母様】はもう一杯紅茶を自分のカップに注ぐと【ネロス】のカップにも注いだ。

「【レミナ】の気持ちも・・・考えてやってくれんかのお？」

「わかってるよ。今日の【建国祭】は【レミナ】と一緒に楽しむから・・・」

「おお、そうかい！なら、今日は朝帰りじゃな！」

「はあ？」

【祖母様】の言葉に【ネロス】は驚き、そして数秒後、赤面した。

「なんじゃ？そのつもりだったのか？・・・優しく抱き締めるんじやぞ？なにせ、まだ処じ」

「やりませんから！祭終わったら、直ぐに帰りますから！」

「なんじゃ、つまらんのお・・・もう十八なんじゃろ？」

【祖母様】は“グビグビ”と音を発てて、カップの中の紅茶を飲んだ。【ネロス】も赤面しながらも“チョロチョロ”と飲んでいた。

「そうじゃ、二人に耳寄りの情報があるんじゃよ。」

「何？」

「今日はこの国に【歌姫】が歌を歌うんじゃないよ。二人にも、国王に頼んで特等席を用意しようか？」

「【歌姫】ってあの【歌姫】？」

「そうじゃ。」

【ネロス】はうなりをあげて考えた。隣りでは、バルバトスが【ネロス】に寄り掛かり寝ていた。

「・・・いや、いや。」

「・・・そうか。なら、二人で自由に楽しむがよい。」

【祖母様】は最後の一口を飲むと、立ち上がった。

「どっか行くの？」

「ちよいとそこまでじゃ・・・留守番頼むぞ？」

「わかった。」

【祖母様】が出て行ったあと、【ネロス】はバルバトスを起こさないように寝転がると天井をジッと見つめ、そして瞼を閉じた。

妖艶に光る火の明かりの中、茶色の布を被った男はまっすぐ続く石畳の路地を歩いていた。空は茜色に染まり、人々の賑わいが遠くから聞こえて来た。

「・・・」

無言のまま歩いている男の前に広がるのは、只、永遠に続くような路地の向こうにある大きな壁だった。その壁から数十メートルの所には大きな窓ガラスがはめられていた。

「・・・」

その時、一陣の風が吹いたのと同時に男は消えていた。

「・・・」

そして、現われた所は窓ガラスの内側だった。頭半分を窓ガラスから覗かしていた、その外側の外壁の溝には砂がまるで蛇のように“ウネウネ”と波打ち、窓ガラスの内側に入り込んでいた。

その2

今日は【建国祭】。

遠くから様々な人達が来て、国は想像以上に活気ついていた。

しかし、何故この砂漠の国に遠くから来た【貴族】がくるのか。それは、この大国の王様が【世界的に有名な歌姫】を招き入れたから。その【歌姫】は、有名人だが滅多に人前に姿を表さず、国中から招待されても全て断って来たのだ。

それじゃ、何故この大国の王様は【歌姫】を招き入れる事が出来たのか。

私にはわからない。わからないが、今日の【建国祭】はとても楽しみにしている。

だって、今日は【デート】ですもの。【ネロス】はどう思っているかわからないけど。

夕日が眩しく、この大国を海の向こうから照らしていた。茜色に染まる【ドウニウス王国】は沢山の人で溢れ、色々な店が並び、大通りではこの大国の住民が最後の飾り付けに専念していた。しかし、一軒だけ何も準備をしていない家があった。

「祖母様ああ！いるう？」

それは、私の家。藁を沢山東ねた大きな家で私と祖母様、そして一匹のペットを飼って暮らしている。

「いないのかな・・・まあ、いいや。」

あの頃から、全く変わらない家。古臭いけど、住み心地がよく、安らぐ只一つの私の家。

「あ、【ネロス】・・・」

真直ぐ続く廊下を進むと、広い居間に出た。そこには私の幼馴染み【ネロス】がペットのバルバトスを抱いて寝ていた。まだ、幼いその顔はまるで天使のように安らかで、小さく柔らかいバルバトスを優しく抱き締めるその姿が本当に可愛かった。

「可愛い・・・初めて見る・・・【ネロス】の寝顔。」

心がときめいた私は【ネロス】の正面に立ち、しゃがんだ。そして、人差し指で【ネロス】の柔らかい頬を突っ突いた。

「・・・んう・・・ん・・・」

呻いた【ネロス】は体を縮こませて、バルバトスを自分の頬にくっつけた。それは、バルバトスが【ネロス】の頬にキスをするような格好で、私は少し嫉いてしまい、少しだけ爪を立てて頬をつついた。

「・・・う・・・ふう・・・あ、【レミナ】」

「おはよう【ネロス】。もう夕方よ？」

【ネロス】の左頬は少し赤くなっていた。バルバトスを抱いたまま【ネロス】は上半身だけ起こして、顎をテーブルに乗せた。

「・・・眠い、なんかボーとする。」

「寝過ぎよ！ほら、早く着替えて・・・汗でビショビショよ？」

「・・・わかった・・・シャワー浴びてくる・・・着替えは？」

「そのダンスにあるから適当に選んで。」

【ネロス】は私にバルバトスを預けるとノロノロと立ち上がり、ダンスから着替えを取り、奥にある浴室に進んで行った。

「ミユユ・・・」

「起きちゃった？バルバトス？」

かわいらしい声をあげて、バルバトスは半目を開けて私を見ていた。柔らかな茶色の毛に紫色の瞳が私を見上げていた。

「バルバトスう・・・今日はデートなんだぞ？羨ましいだろう。」

「ミユユ・・・」

私はバルバトスの頭を撫でた。目を閉じて気持ち良さそうに身をゆだねているバルバトスはとても幸せそうだった。

「しかも、今日は【歌姫】が来るんだって・・・わかんないか、バルバトスには・・・」

奥の方で、シャワーが流れ出る音が聞こえてきた。

「だけど、【ネロス】はデートって自覚してるのかしら？バルバトスはと思う？」

私はバルバトスを持ち上げると、紫色の瞳をジッと見た。首を傾げたバルバトスを私はほほ笑みながら肩に乗せた。

「バルバトスも一緒に連れて行くからね・・・邪魔しちゃう駄目よ？」

「ミユ！」

その後、私は肩に乗るバルバトスをこちよがしたり、遊んでいた。しかしその時、いきなり“ガラガラ”と奥の扉が開くのと同時に【ネロス】が現われた。湯気が発つ体は、ほぼ裸に近かった。

「・・・どしたの？」

「どしたの？じゃないこの馬鹿！早く上を着ろ！そして、パ、パンツの上にも何か着ろ！」

「あ、悪い、今着替えるよ。」

一瞬だけだったが、【ネロス】の体は無駄な贅肉がなく、少し筋肉質な体をしていた。

「・・・・・・・・ちよつと綺麗だったな・・」

「・・・・・・・・何か言った？」

「言っていない！早く着替えなさいよ！」

「もう、着替えたよ。」

私は顔を覆っていた手を退けた。【ネロス】は、脛辺りまでの長さのデニムのハーフパンツに濃い青色に赤や黄色等の模様が付いた厚いシャツを着ていた。

「・・・・・・・・似合ってたじゃん。」

「そうかなあ？」

「似合ってる似合ってる！それじゃ行きましょ！」

「え！もう？」

「出店に行つて美味しい物食べるの！今日しか買えない限定品も買わなくちゃ行けないから速く行きましょ！」

「あ、ああ・・・わかった。」

テーブルの上にあつた財布を【ネロス】は手に持ち、空は既に星が点々と輝いている中、私と【ネロス】は家を出て、急いで大通りに向つた。

上空では色の付いた火薬の大弾が放たれ、爆発し、綺麗な火の粉を飛ばしながら【建国祭】が始まつた。大通りでは沢山の人が歓声をあげて、先頭で豪華な装飾を施した馬車に手を振っていた。そして、その人達に答えるように王様と王妃様、その隣りの王子も優雅に手を振っていた。

「はあ・・・ちよつと休憩しようか？」

「うん。」

馬車の前には鎧を来た兵隊がラツパを片手に、リズミカルに行進をしていた。そして、そのパレードが緩やかなカーブを曲がるその上には小さな丘があり、そこで【ネロス】と【レミナ】は近くにあるベンチに腰掛けた。

「【レミナ】・・・こんなに買って大丈夫なのか？・・・てか、買い過ぎだろう。重いし・・・」

【ネロス】は両手に二個ずつ持っている紙袋を持ち、【レミナ】に見せた。

「・・・ちよつと買い過ぎたかも・・・でも、もう買わないから大丈夫よ。」

さっきまで【レミナ】の肩に乗っていたバルバトスはポケットの中にうずくまるように顔を出していた。ドウニウス王国は太陽が出ている時は真夏のように暑いが、夜になると凍えるように寒い。【ネロス】と【レミナ】も露店で買った生地が分厚い服を着ていた。

「・・・綺麗・・・星のように輝いている。」

「・・・うん。」

丘から見える風景は、星のように輝き、神秘的だった。その向こうに見える半円状の建物にそのパレードは向って行った。

「あそこで・・・【歌姫】が歌うんだね。」

「そうなんだ・・・なんでこんな砂漠の国に【歌姫】が来たんだろっね？」

「さあ・・・わかんない。」

二人の会話はそこで途絶えた。聞こえてくるのはラッパのリズミカルな音、王様に手を振る人々の歓声、二人と同じようにこの丘の上でパレードを見ている恋人達の会話だった。

「・・・」

「・・・」

「・・・ねえ【ネロス】。」

「ん？」

「【ネロス】は・・・その・・・あつちで・・・彼女とか出来たの？」

「いや、いないよ。」

「そう・・・なんで作らないの？」

「・・・作る余裕がない・・・かな？」

「ふん・・・」

そんな二人を空に広がる星が照らしていた。しかし、この大国の住民も二人も気付いていなかった。少しずつ、ゆったりだが着実に星と中心にぼつりとある月は赤く染まっていた。

「今宵は素晴らしい夜になりますな。」

「これはこれは・・・【ルカ様】！」

沢山の白い髭を生やした王様は一人の老婆に一礼をした。その隣りにいる王妃、王子も同じく一礼をした。

「今日は御親族も一緒に？」

「フツッ、【レミナ】はデートじゃよ。」

「おお！そうでございますか・・・あの子ももう十八歳ですからな・・・」

ルカと王様達は親しいのか雑談を交わしながら、長い階段を登って行った。そこは天井が球体状に広がり、奥には赤く分厚い幕が垂れ下がっていた。王様達がいる所からはこの建物の中が一望出来て、等間隔に設置されている柔らかな椅子には沢山の人達がドレスやタキシードを身に付けていた。

「・・・【ヴェルディ様】が見当たらないが・・・」

「ああ・・・今日は建国祭だと言つのに【あいつ】は部屋から一歩も出ないで寝てばかり・・・全く、同じ王家の血を引き継ぐものとして恥ずかしい限りです。」

「・・・そうですか。」

その時、会場全体が暗くなり拍手が湧き上がった。赤い幕が上がり、その中心に立つのは白い肌を隠すように身に付けた服に、銀色の髪を肩まで伸ばし、ダイヤモンドのように輝く瞳を真直ぐ、会場の中心を見つめる少女の姿だった。

「あれが・・・【歌姫】ですか・・・何かの間違いじゃ・・・」

「私も最初は思った。しかし、彼女の声を聞いて確信した・・・彼女は【歌姫】・・・」

会場はざわついていた。皆【歌姫】を見て驚き、恐怖し、見入っていた。

「誰も彼女を【見たことがない】・・・大変でした・・・交渉がうまく行かずに。しかし・・・」

王様は微笑みながら両腕を組み、【歌姫】をジッと見つめた。

「今日で彼女は【本当の歌姫】として、生まれ変わる。この国が世界の中心に立つ証となる。・・・【世界制覇】の為の道具として・・・」

最後の言葉はかき消された。【歌姫】の洗礼で大きな声に会場の人々は聞き入ってしまい、感じていた。炎の光で彼女の頭に生えている銀色の【二本の角】は神秘的に輝いていた。

城の中はロウソクの火が等間隔に付けられていて、その廊下を兵士が巡回していた。そして廊下の一番奥、ロウソクが二つ取り付けられている部屋の中に、無言で本をめくっている男がいた。腰に付けている銃は部屋の中にあるロウソクの火が怪しく照らしていた。

「・・・」

男が見ていた本には、細かな文字が描かれていてその横には、【角を生やした黒い翼の男性】と【銀髪を生やした白い翼の女性】が手を取り合っていた。その間には、手を広げた少女が描かれていた。

「・・・」

そして、男が次のページを開こうとした時、廊下で慌ただしく走る音と兵士の叫び声が聞えた。

「・・・っ・・・なんだよ。うるさいなあ・・・」

男は開きかけたページをそのままに立ち上がると、扉に近付き開くとした。その直後、“ドガッ”と扉に倒れる音がした。

「や、止める！来るな！・・・ひいい、ひやああ

！」

肉を突き刺す音と共に、向こう側から聞える兵士の叫び声は消えた。

「な、何なんだ・・・賊か？賊が入り込んだのか・・・」

男は腰にある銃を手に取り、横たわるようにして死んでいる兵士がいると思われる扉をゆっくりと力を入れて開いた。

その3（前書き）

やっと戦いらしき物が始まりました。此所まで、呼んでくださいました読者の皆様。

本当に有り難うございます。 m ((m

その3

男の目の前に広がる光景は、想像を絶するものだった。

男の足元で、胸を刺され絶命する兵士。

壁に寄り掛かるようにして、死んでいる首のない死体。

槍を体に突き刺さった状態で白目をむき出して死んでいる死体。

血が廊下中に広がり、生臭い匂いがして男は口を隠した。

「なんだよこれは・・・残虐過ぎる・・・隠れよう・・・」

「この・・・化け物が！」

部屋の中に戻ろうとした時、廊下の向こう側で叫び声がした。どうやら賊は向こう側で兵士達と戦っているようだった。金属のぶつかる音が、響き渡っていた。

「頑張ってくれ諸君・・・俺は隠れさせてもらう。」

「なんだこいつ！不死身か！」

「人間じゃねえ！何で【砂】が出てくるんだ！」

奥の方から聞こえてくる言葉に男は耳を疑った。

「・・・砂？兵士は、頭が混乱してるのか・・・いや、待てよ・・・
確か・・・」

男は急いで、部屋に戻ると先程読んでいた本のページを戻した。
“ペラペラ”と素早く戻していき、ある内容のページで男は止めた。

タイトルは【神界物語】。

この世界に伝わる【古代時代の歴史】を基づいて書かれたその本には、度々【神】や【魔物】【精霊】が出てきている。その多くが【妄想】と【想像】の渦の物だが、調査により【魔物】は実在していた。

そして、男が止めたページにはこんな事が書かれていた。

【作られし、神王の影は、一つは全てを食べつくし、一つは輝く岩となり、一つは水になり、一つは影になり、一つは化粧をし、一つは火炎となり、一つは砂となる。その不死身の影は・・・】

「まさかな・・・何馬鹿な事を考えてるんだ、俺は？・・・」

既に兵士の声は聞こえてこなかった。男は閉めた扉をジッと見つめると、歩み寄り、鍵を閉めた。

その時、男はある気配を感じた。ドス黒く、無限の闇が続きそうな視線を背中から感じた。

男は後ろを振り返らず、横に素早く転がった。

“ドス！”と目の前で、銀色の装飾が施されたナイフが扉に深々と刺さっていた。

「いつの間に！この賊が！」

ナイフを扉に刺した【血だらけのボロボロの布を被った男】に銃を向けると、いきよいよく引き金を引いた。

硝煙を上げ、弾丸は男の頭に命中し、後ろにのけ反り倒れた。

「こいつ……何処から現れたんだ？扉を開ける音さえしなかったぞ……」

尚も銃を突き付けたまま、き付けたまま、男は立ち上がると【倒れている男】に近付き茶色の布を剥した。

「これは……」

布の下には、男の死体はなく、あるのは“サラサラ”とこぼれ落ちる【砂】だった。

そして、その砂は盛り上がると、いきよいよく【爆発】し、撒き上がった砂が、男の首に巻き付いた。

砂とは思えない力で締め上げて、男は苦しみながらも、首に巻き付く砂を払おうとした。しかし、幾ら払っても砂はなくなり、残りの砂は男の目の前で【別の物】に変わっていた。

「な！……おま……えは……」

それは、漆黒の瞳を右目から覗かしていて、左目は灰色の前髪で隠されているが、ある特徴を体に醸し出していた。

「まさか・・・女・・・の化け物とはな・・・魔物は・・・全滅した・・・
筈・・・」

その姿は、正しく女性だった。ある程度の膨らみがあり、軽装で、下半身は砂の渦、そして、少女のような女性は無言のまま、腰に携えたもう一本のナイフを取り出した。

「俺が・・・魔物に・・・殺される・・・だと・・・舐めるなあ・・・
俺は・・・俺は！」

女性がナイフを振り上げた時、男は咄嗟に女性の目の前で手をかざし、その後ろに銃を重ねた。

「俺は！・・・ボルクリフ！・・・ボルクリフ教授だ！」

一発の銃撃と共に、【ボルクリフ】の手を弾丸が貫通し、飛び散る血液と共に、女性の左肩を貫通した。

「！！！」

女性は驚き、左肩を触った。右手には燃え上がるような真っ赤な血が付着し、それを、苦しみながらも男は笑いながら見ていた。

「どお・・・だ・・・俺の血は・・・【濡れて】・・・【固まる】だ・・・その右手も・・・もう・・・」

男は銃を降ろすと、床に落とし、うなだれた。床に落ちるように倒れた男を、見下しながら、女性の下半身は形を変えて、二本の足になった。

「・・・魔物・・・じゃない。」

女性は、床に落ちている布を手にとると、右手に付着した血を拭き、左肩に強く押さえた。

「人間だ・・・」

女性は、左肩から流れる血を押さえながら、男の読んでいた本を手にとった。表紙が所々汚れて、ボロボロだったが、金箔が施されていた。

「何故・・・この男が、重要文化財の本を持っているか知らないが・・・この本も盗ませてもらう。」

その本を手に持ち、女性は男を跨ぎ、扉のノブに手をかけた。

その時、大きな爆音と共に城が揺れた。

何かに突き上げられるような揺れに、天井に小さなヒビが走り、小さな欠片が“パラパラ”と落ちてきた。

女性は体制を低くし、揺れに耐えていた。そして、その揺れは徐々に弱まり、止った。

「なんだ・・・今の揺れは・・・」

女性は、急いで扉を開き、向かい側に位置する窓ガラスから、城下を見た。

「あれは・・・なん・・・だ・・・」

目の前には、華やかに輝く建物が目に入った。しかしその向こう、街を囲むようにして立つ城壁が大きく崩れ、大きな穴が開いていた。

そして、そこから現れたのは、巨大な、豚のような鼻を持ち、片手には大きな棍棒、紫色の体に頭部には二本の大きな角を持つ、牛のような巨人だった。

それは、本当に突然の出来事だった。大きな揺れと共に、私と兵士長、その他数十名の兵士は、床に這いつくばっていた。

目の前には、多数の死体が激しい揺れに踊るように動いていた。

「くっ！・・・なんだこの揺れは・・・【ロザミア補佐長】！君は城の内部の被害状況を確認してくれ！」

「しかし！まだ、賊が・・・」

「君は私に指図をするのか！いいから行って来い！君がいなくても、

私達で十分だ！」

「・・・わかりました。」

揺れが収まったあと、私は兵士長とは逆の廊下を走った。後ろでは、兵士長の合図と共に私以外の兵士が掛け声を上げていた。

「何が兵士長だ・・・金で今の地位を貰ったくせに・・・憎たらしい！」

すれ違う兵士達は、皆私を馬鹿にしているかのように、目を細くして私の後ろ姿を睨み付けていた。

「女の何が悪い・・・私の方が技量が上なのに・・・国王からも信頼されているのに・・・」

私は愚痴をこぼしながらも、【命令】として城内をくまなく調べた。

あの大きな地震だったのにもかかわらず、城内は小さなヒビが入る程度で、損傷もなく、怪我人もいなかった。皆、【歌姫】の歌を聞きに行っているのか、何処の部屋にも人はいなかった。

「異常はなしか・・・【ウ”エルディ王子】の部屋も見に行くか・・・」

「僕なら大丈夫だよ。」

既に【ウ”エルディ王子】は私の後ろで、寝間着姿のまま、大きな欠伸をして立っていた。

「王子・・・無事でしたか。」

「ああ・・・それよりもあれを見てみる。」

王子が怠そうに、指を指した所は私の隣りにある色とりどりの大きな窓ガラスだった。

「開けて見てみるよ・・・」

私は窓の鍵を外し、身を乗り出すように外を見た。

そして、私は驚愕した。

余りにも巨大な牛のような動物が、街を破壊しながら進み、その後ろを二本足で歩く不気味な人と、銀色の狼が人々を襲っていた。

「なんだこれは！」

「僕にもわからない・・・只、このままだと・・・」

私は王子がいい終わる前に、部屋から出て行った。住人を守るために、王子の言葉を聞いている暇など、私にはなかった。

「なんだ今の地震は・・・おい！状況確認だ！後、皆の避難をしろ！」

王様は一人の兵士に命令をすると、隣りにいた王妃、王子に避難するよう促した。

「なんじゃ今の地震は・・・」

「【ルカ様】も早く避難を・・・」

「ふむ・・・そうじゃな。【レミナ】と【ネロス】も心配じゃ・・・」

【ルカ】は王様に一礼をすると、そそくさと階段を降りて入った。

目の前には、混乱しながらも避難をしている貴婦人達。既に【歌姫】はいなく、王様は拳を握り締めた。

「クソ・・・何故この【建国祭】の時期に地震など起きるんだ・・・」

王様は齒を噛み締め、悔しがっていると、舞台に立つ女性を見つけ
た。黒い髪に、胸元を開けた妖艶なドレスを身に付けた女性は、【
歌姫】が出て入った右側の舞台裏に行こうとしていた。

「おい！アイツは誰なんだ！早く降ろせ！」

「は、はい！・・・おい、そこのお前！舞台に上がるんじゃない！」

二人の兵士に命令をして、同じく舞台に上がると、女性を押さえよ
うと腕を掴んだ。

その時、掴もうとした兵士の腕が空を舞い、血しぶきを上げて、落
ちた。

叫び声の中、もう一人は鞘から剣を抜くと女性に向けた。

しかし、既にそこには女性の姿はなく、それを見ていた人々はどよめいた。

「何をしている！賊が入り込んだのだぞ！探せ！」

腕を切られた兵士を他の兵士に預けて、仲間を呼ぶと、二手に分かれて舞台裏に入ってしまった。

「クソ・クソ！なんで賊何かが入り込んでるのだ！」

「王様！大変です！」

「今度はなんだ！」

「はい！街に・・街に巨大な化け物が・・それに、住人が・・」

「なあにいい・・・」

王様は、顔を赤くして、目をつり上げていた。そして、兵士の後ろを追うように階段を降りると、外に出た。

「な、なんだ・・・これは・・・」

王様は顔を青ざめて立ち尽くし、一点を見つめた。

王様の数百メートル先に、あの巨大な牛のような獣が大地を揺らしながら、ゆっくりとこちらに迫って来ていた。

「何なんだあれは・・・おい！」

「はっ！」

「あの化け物を追い払え。」

「えっ・・・」

王様の一言に兵士達は驚いた。兵士よりも数十倍巨大な化け物を対峙するなんて誰も考えていなかった。

しかし、勝てる見込みがない戦いを王様はやるうとしていた。

「お前達を守らなくてはいけない物はなんだ！・・・忠誠だろ？」

「し、しかし・・・」

「戦わず、逃げる者は忠誠を誓わない【負け犬】 又は【反逆者】だ・
・そうだと思わないかね？」

「【負け犬】・・・【反逆者】・・・」

兵士達はそれぞれ、顔を見合っていた。【負け犬】 【反逆者】という言葉に反応し、兵士達は皆、雄叫びを上げて、槍や剣を持ち、化け物に向かって行った。

「そう、君達は【負け犬】 【反逆者】という言葉が嫌いなのだ・・・
・【昔の過ち】を犯さないためにも・・・私は【王】だ、【王】がいなければ国は成り立たない。」

そう言い残すと、王様は建物の中に逃げるようにして、入って行った。

その4（前書き）

後書きにて報告あり。

その4

一体何が起きたんだ……

僕は、確か【レミナ】と一緒にパレードを見た後、あの丘の上から星を眺めながら会話をしていた……

その時、突然大きな地震が起きた後、丘が滑るように崩れて、僕と【レミナ】はそのまま落ちていった……

「痛！……此所は……」

どうやら僕は、気を失っていたようだ。瓦礫の奥から赤い光が漏れ、騒ぎ立てる人々の声で、僕は目を覚ました。

「【レミナ】無事か？【レミナ】！」

僕は、俯せたまま【レミナ】を呼んだ。絶妙なバランスで瓦礫が覆かぶさっていて、少しでも動けば、瓦礫が崩れ落ちそうだった。

「クソ！……無事でいてくれよ……」

僕は【レミナ】の無事を祈りつつ、瓦礫の奥にある光に向って、ゆっくり這っていった。

この瓦礫は、丘の前にあつた刃物屋の建物だった。あちらこちらに、売り物の包丁やナイフが瓦礫に潰されていた。辺りには鉄屑とかした刃物の欠片があり、その中を、痛む体に鞭を打ち、慎重に進んだ。

「よし・・・このまま・・・慎重に行けば・・・」

漏れてくる光は、とても赤かった。多分、近くでは火事が起きていて、人々は火を消しながら人命共助をしているはずだ。

ようやく、光が漏れる瓦礫の隙間に到達した僕は、腹に力を入れて助けを呼んだ。向こうでは、火が立ち上がり、人々が人命共助を行っているはずだった。

しかし、僕は知らなかった。

向こうより、今、僕がいる所の方が最も安全だと……

そして、【レミナ】も僕と同じ所にいるとは、限らない事も……

それは、地獄絵図のようだった。突然現われた【巨大な牛人間】。

牛人間の後ろを追うように現われた、上下の鋭い牙を光らせた【醜い人間】、銀色の毛並みで真っ赤な目をむき出しにする【狼】は、逃げ惑う人々を襲い……

殺し、その肉をむさぼるように食べていた。

辺りには、【人間だった物の肉片】が散らばり、血が飛び散り、悲痛的な叫び声が聞こえてきていた。

その中、兵士達は槍や剣を持ち、その【化け物】を追ひ払おうと立ち向かっていた。鎧は血に染まり、槍は【化け物】を突き刺し、剣は【化け物】を切り倒していた。

しかし、兵士達よりも圧倒的に【化け物】の数は凄まじく、取り囲まれた兵士も、同じように【肉塊】になっていった。

徐々に、兵士の数が少なくなる中、ある一画だけ、他とは状況が違う場所があった。

そこは、商業区と工業区の間にある飲食店街。

一人の男の持つ、大きく赤い大剣の横一閃の一払いで、数体の【化け物】は血濺きを流し、死んでいた。

「何なんだよ、こいつらはよ！」

男の着ていた鎧は、血で染まり、周りには【化け物だった物】が転がり、それを数十人の兵士達は呆然と見ていた。

「おい、お前ら！」

男は、大剣を肩に抱え、兵士達を睨み付けた。

「何、ボーとしてんだ？俺は腹が減ってイライラしてんだよ！手伝え！」

そう言った男は、後ろに続く路上を指差した。

そこには、雄叫びをあげる【醜い人間】と唸り声をはなつ【狼】が徐々に近付いてきていた。その【化け物達】は血で赤く染まり、牙や体には、何かの肉が付着していた。

「行くぞお！殺らなきゃ殺られるんだからな！」

男は、抱えた大剣を掲げ上げると、【化け物達】に突撃し、大きく切りかかった。

男の隙を突こうと、【醜い人間】は鋭い爪を振り上げたが、それよりも速く、男の大剣の一振りが【化け物】を肉塊に変えていった。襲いかかる【化け物達】を大剣で、切り倒すその姿に感銘を受けたのか、お互い頷きながら、【化け物達】に向って行った。

「我々も手伝います！」

一人の兵士が、男の攻撃を避けた【狼】の頭部に槍を突き刺した。

それを、かわきりに兵士達は男の逃した【化け物】に槍で突き刺し、剣で切り倒した。

頭部を突き刺され、真つ赤な目玉を飛び出し、痙攣しながら生き絶えた【狼】に、覆かぶさるように【醜い人間】の胴体が倒れ落ちた。

「ハア・・・ハア・・・」

男と兵士達の周りには、無数の死体が転がっていた。空は、赤く燃え上がるように星が輝き、邪悪で揚々とした光が降り注いでいた。

「おい・・・こいつらは一体何なんだ・・・こんな奴等、見た事がない・・・」

「我々にもわかりません、只・・・」

一人の兵士は、飲食街の一本道を指差した。そこには、半円型の建物が遠くに建ち、周りには、赤淡く光に照らされた建物が建ち並んでいた。

「巨大な・・・牛のような人間の後ろからこいつらは、現れました・・・」

「そうか、ならその【牛人間】を倒せばいいんだな・・・」

「し、しかし・・・我々ではあんな・・・巨大な奴に打ち勝つ事は、到底・・・」

「それでもお前らは、国を守る兵士か？」

「な、なんだと！」

男の一言に、一人の兵士は顔を真っ赤にし怒鳴った。

「たかが流れものの傭兵風情が！」

「傭兵？・・・俺は賞金首ハンターだ。」

「はあ？・・・」

男は真直ぐ前を見据えた。炎は一切上がっていないのにもかかわらず赤く、生臭い匂いが漂っていた。

「こりゃ・・・国王からたんまりと御礼が・・・行くぞ、兵士諸君！」

男は腕を高々と上げ、叫んだ。

噴水の水は赤く濁り、傍らには内臓が飛び出した人間の下半身が横たわっていた。既にそこは憩いの場とは思えない、その公園に血に染まった鎧を上下に揺らし、槍を突き刺し払いのける女性がいた。その一刺しは的確に【化け物】の頭部を刺し、【化け物】は死んでいった。

「これで・・・最後か・・・」

最後の一刺しを【醜い人間】の頭部を貫通するとそのまま振り上げた。ピンク色の脳が飛び散り、【醜い人間】は後ろに倒れてピクリともしなかった。

「何者なんだ？私はこんな【人間】や【狼】を見た事がない・・・」

先程死んだ【化け物】の体を女性はやがてのように触れた。無造作に

生える小さな毛は、固く鋭く尖んがっていた。皮は分厚くいくえいにも皺が広がっていた。

「これは生き物なのか・・・しかし、こんな生き物を知らない・・・」

女性の背後には、等間隔に木が植え付けられていて、その影から真つ赤な目玉を女性に向ける【狼】がいた。

唸り声を上げて、女性の首筋に狙いを定めた【狼】は女性が立ち上がった瞬間に物凄いスピードで背後から襲いかかった。

飛び上がり、女性の首筋に鋭い牙を突き立てようとした時、女性は振り向かずに、槍を後ろから突上げた。

“グシャ”と刺さり、目玉が飛び出た【狼】はその瞬間、動かなくなった。

「殺気が物凄いな・・・と言う事は、この【化け物達】には【意思】があり、考える事が出来るんだな。」

女性は、後ろを振り向き睨み付けた。木々の間から数十体の【化け物】が唸り声を上げ、迫って来ていた。

しかし、一つだけ違うところがあった。

【狼】は木の影から、こちらを伺っていた。そして、【醜い人間】は兵士が使っていた槍や剣を持ち、構えていたのだ。

「【知識】を得たか・・・だが負けない。」

槍を思い切り振り落とし、突き刺さっていた【狼】を一人の【醜い人間】の顔面にぶつけた。

【醜い人間】の顔面に当たった直後、女性の鋭い槍は既に【死んだ狼】と【醜い人間】の頭部を突き刺していた。

その4（後書き）

今回から【3ページ】から【2ページ】にする事にしました。理由は特にないですが……

後、選手から自動車学校に通っていますので、更新多分遅れます。
ご了承くださいm（ー）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5914d/>

In the crime, the punishment, and dusk（一時的小説更新停止）

2010年10月9日21時50分発行